

奔放な詩魂に導かれて
前田和泉著『マリーナ・ツヴェターエワ』
未知谷，2006年

竹内恵子

日本におけるツヴェターエワ研究の第一人者である著者によって、渾身の力作『マリーナ・ツヴェターエワ』が遂に刊行された。400ページを超える大作である。

本書は、ふんだんに資料写真が盛り込まれた評伝という形式をとっているが、要所要所に適切な作品紹介が行われ、ツヴェターエワの詩的世界の全貌が容易に把握できるものになっており、いわば本格的な研究書に迫る出来映えになっている。本書の登場をもって、本邦の20世紀ロシア詩研究は、水野忠夫の『マヤコフスキイ・ノート』（中央公論社，1973年／新版・平凡社，2006年）、亀山郁夫の『甦るフレーブニコフ』（晶文社，1989年）の系譜に連なる好著を得たといふべきだろう。

本書は詩人の幼年時代から書き起こされていくが、特筆すべきは、ツヴェターエワの母親マリヤに焦点が当てられている点だ。従来、クローズアップされてきたのは、僻村の出身ながらモスクワ大学教授にまで昇りつめ、「プーシキン美術館」の創設者として名高い父イワン・ツヴェターエフの方だったからだ。しかし、本書によって、この仕事熱心な父親は家庭内ではむしろ影の薄い存在であり、幼いマリーナに対して圧倒的な影響を及ぼしたのは母マリヤだったことを、読者は知ることになる。

また、ツヴェターエワが既婚者でありながら、女性詩人ソフィヤ・パルノークと同性愛の関係にあったことは、これまでにS・カーリンスキーの『知られざるマリーナ・ツヴェターエワ』（亀山郁夫訳、晶文社，1992年）でも指摘されてきた。しかし、本書では二人の関係に言及するだけでなく、連作詩「女友達」を的確に引用することによって、詩人の秘められた私生活と詩作品を有機的に結びつけることに成功している。それも、ツヴェターエワ側からの一方通行的な視点に固執することなく、対応するパルノークの詩も掲げるなど、当時のツヴェターエワをめぐる複雑な立場が、まさしく「立体的に」浮かび上がってくる構造になっているのだ。

こういった立体的・複眼的な構造は本書の長所の一つであるが（それは、著者が多数の資料を渉猟し、自在に駆使していることの証左に他ならない）、この手法は、ツヴェターエワとマンデリシュタームの交流を描く際にも、いかに発揮されている。更に圧巻と

いえるのが、ツヴェターエフとドイツの詩人リルケの文通を追跡した第6章だろう。亡命先で文壇から孤立していたツヴェターエフが、パステルナークの仲介によって最晩年のリルケと、短期間（1926年5月～12月）ながらきわめて濃密な内容の、ドイツ語による往復書簡を交わしたのだ。残念ながらリルケの急逝によって文通は断ち切られるが、ツヴェターエフは彼の死を契機として、ロシア詩史上の傑作詩篇「新しき年」を執筆する（この詩は、ツヴェターエフを「20世紀ロシアの最も優れた詩人」としてこよなく尊敬した現代詩人ヨシフ・ブロツキイが詳細に論じていることでも知られる）。国境を越えたこの交流を、ツヴェターエフのみならず、リルケ、パステルナークそれぞれの立場から照明を当てたこの章は、本書の白眉といえよう。

そして本書は、参照資料の充実という面からも、ツヴェターエフ研究の最前線に立つものである。プラハでのロジェーヴィチとの不倫愛は、名作「山の詩」と「終わりの詩」の執筆動機となった重要な事件だが、詩人がこの恋人に宛てた30通以上にも及ぶ書簡は、西暦2000年まで非公開とされてきた。本書は、公開されたばかりの書簡群を巧みに織り込むことにより、これまで判然としていなかったプラハでのツヴェターエフの心境に、見事に肉薄している。

ちなみに、この書簡の秘匿を遺言によって命じたのは、ツヴェターエフの娘アリアードナである。本書ではまた、一人の母親としてのツヴェターエフと子供たちの関係が赤裸々に描かれている。従来、詩人が死の直前まで、息子ゲオルギーと良好な関係を築けなかったことは知られていたが、彼女が反抗期の娘とも冷戦状態にあったことを、評者は本書によって初めて知った。皮肉なことに、アリアードナが母親の偉大さを真に理解し、その遺稿を守り抜こうと決意するのは、ツヴェターエフの悲劇的な自死の後、自身は強制収容所に収監されている時のことである。ブルガーコフの^{ひそ}罎みに倣って言えば、まさに「原稿は燃えない」ものなのであり、本書は詩人の遺志を受け継いだ娘の尽力によって、ツヴェターエフの詩的世界がcaろうじて「生き延びた」ことを確認して、感動的に締めくくられる。

以上、略述したように、本書は波乱万丈のツヴェターエフの生涯を、一貫して質の高い文体で綴った非常に優れた評伝だが、あえて無理な注文をつけるなら、ツヴェターエフの特異な詩的技法について大胆に踏み込んだ解説があれば、入門書としてもより充実したのではないかと思う。仮に全くロシア語を解さない日本人読者が本書におけるツヴェターエフの詩の翻訳を目にしたとしても、詩行中に大量のダッシュ（——）や句読点、疑問符・感嘆符が存在することに気づかないはずはない。このような手法がどのようなリズム感や音楽性を生み出しているか、知りたいと思う読者もきっといるに違いない。

また、アフマートワによって「ザーウミ」とすら評されたツヴェターエフの詩学は、どういふ点が革新的だったのか。更に、ツヴェターエフはどの程度、未来派の運動や理論に通暁していたのか（例えば、ツヴェターエフがケレンスキーに捧げた詩の草稿写真〔本書、

125頁]は、アヴァンギャルド派の画家たちがクルチョーヌイフ等の詩集に添えた、ルボーク風にデザインされた字体に似通っている。なお、本書によれば、ツヴェターエフがラリオーフ、ゴンチャローワ夫妻と親交を深めたのは、亡命先のパリにおいてだったという。

そもそも、ツヴェターエフという詩人は、フォルマリズムをも含め、様々な文学批評や詩的技法を「研究」した上で実践するタイプだったのか、それとも、あれほどの実験精神に富んだ彼女の創作は、あくまで天才的なひらめきのなせる業^{わざ}だったのか。こういった数々の疑問を解明するということはきわめて困難な作業だと思われるが、プロツキイを初めとして、ツヴェターエフの革新性に影響を受けた、後世の詩人に対する研究にも大きなヒントを与えるに違いない。期待は高まるばかりである。

なお、以上の点は、本書の持つ魅力を少しも損なうものではない。冒頭から結末まで一気呵成に読ませてしまう著者の筆力もさることながら、本書はまさに、一人の芸術家の作品と生涯を献身的に跡づけることが、研究者をいかに鍛えあげ、成長させるかということの好例そのものである。本書は、ロシア文学研究を志す者の必読書であるばかりか、文学を愛好する万人に受け入れられる書物だといえよう。